

テーマ1：	マネジメント向け グループ研究
<p>システムグランドデザイン（システムの基本構想策定）について ～ 自覚と実践：企業システムのデザインと変革推進 ～</p>	
<p>■概要：</p> <p>ITが企業の隅々に浸透し、高度・複雑化し、システム化の超上流工程が重視されるようになってきた。経営との連携、投資効果算定、要求品質のUp、機構・組織・プロセス・人変革との連携などです。要求を明らかにすると同時に関わりを持つ人・組織との合意形成、道筋の明確化と変革の段取りが非常に重要になってきております。これこそ、企業システムを俯瞰し、IT化を理解している皆さんが最も期待され、担うべき役割。</p> <p>このセッションでは、目的思考型のデザイン手法を使い、グランドデザインの本質（何故、何を、どのように）と方便（如何に伝え、合意形成するか）を探り、確かな考え方を備え、実践に結び付けていきます。</p>	
<p>■進め方：</p> <p>円卓会議方式で進行（0.5時間：前回分のまとめ報告 3時間：テーマ協議 0.5時間：考え方のご紹介）。</p> <p>テーマを定め、持ち回り議長（と副議長）に進行役を務めてもらい、その結果を議長の見識で纏め、次回に報告する形態を予定しています（グランドデザインのリード役を想定しています）。そのテーマに関する考え方についてのご紹介も予定しています。</p> <p>以下のようなテーマを仮定しています（別途、メンバーの方に決めていただきます）。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1回目：スコープとグランドデザインに関するステークホルダーの確認（相互作用）</li><li>2回目：そもそも何故グランドデザインか、目的は、次工程は</li><li>3回目：何が出来ればグランドデザインと言えるか（物差と値）</li><li>4回目：じゃあ、それを実現するために重要な事は何か（重点施策の洗い出し）</li><li>5回目：重点施策のターゲット（物差と値）は、実現の仕方は？（ToBe案）</li><li>6回目：皆さんの周りを見渡して問題と特に重要と思しき事項は（AsIs）</li><li>7回目：どう手掛けていけば良いか（CanBe案）</li><li>8回目：グランドデザイン 「自覚と実践」の発信準備</li></ol>	
<p>■募集対象者：</p> <p>グランドデザインの重要性について考えておられる方、課題分析や他社比較は出来るがどうあれば良いか描けない、IT活用のステージアップを図りたいと考えておられる方、IT投資マネジメントや要求仕様策定（RFP）との連携を考えておられる方、経営層への説明に苦慮しておられる方、システム職の有り方について考えておられる方等。</p> <p>いろんな立場の人が、いろんな意見をぶつけて作り上げていきます。</p>	

以上

テーマ2：	マネジメント向け グループ研究
<b>“不況下に求められる経営管理について”</b>	
<b>■概要：</b> <p>企業を取り巻く高度化・複雑化した競争環境下では、当初立案した経営戦略を確実に実行することが非常に重要です。</p> <p>そのためには、当初の経営戦略の進捗度を常時モニタリングし、進捗が遅れているのであれば、確実な施策の実行を指示し、時には新たな施策を打ち出すような経営管理の仕組み（PDCA）が必要となります。</p> <p>更に不況下で求められる経営管理は、単に企業戦略を実行するだけでなく、目標の達成に向けて、どの戦略の施策が利いてどの戦略の施策が利いていないかを、経営層に気づかせる経営インフラの仕組みが求められています。</p> <p>これまでの主張に沿って、BSC（バランスト・スコアカード）を活用し、経営戦略を反映した経営指標体系によって、企業活動を方向づけ、経営戦略を確実に実行する実践的な経営管理の仕組みについて研究します。</p>	
<b>■進め方：</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1回目：自己紹介、経営管理に関する共通認識（メンバー間の意識合わせ）〈6月〉</li><li>2回目：企業ミッション・ビジョンの明確化、対応した戦略の存在の確認〈7月〉</li><li>3回目：戦略の明確化とビジョン&amp;戦略の浸透度調査〈8月〉</li><li>4回目：BSC（バランスト・スコアカード）と戦略マップの作成〈9月〉</li><li>5回目：事業&amp;プロセスレベルのBSCの設計（KPI、目標、施策など）〈10月〉</li><li>6回目：部門、チームレベルでの設計（KPI、目標、施策など）〈11月〉</li><li>7回目：全体整合性の確認とまとめ〈12月〉</li><li>8回目：最終報告書の作成1〈1月〉</li><li>9回目：最終報告書の作成2〈2月〉</li></ol>	
<b>■募集対象者：</b> <p>経理、営業管理、経営企画、人事、情報システム等に所属されて、経営管理業務に携わっているかこれから携わる予定のマネージャー（管理者）か、リーダーの方を対象に致します。</p>	

以上

テーマ3 :	マネジメント向け グループ研究
<b>流通ビジネスにおけるロジスティクス視点での情報分析について ーロジスティクス指標の導入と活用ー</b>	
<p>■ 概要 :</p> <p>ロジスティクスは流通企業の収益性に影響を与え、経営効率を高める重要な機能です。</p> <p>しかし、そのロジスティクスのパフォーマンスを定量的に把握・評価し、経営への貢献を明らかにする手法は確立されていませんでした。</p> <p>物流の3PL化に向けての業務実態把握・分析・改善のため指標の把握が必要となり、3PL業者の視点からまとめられた「物流KPI」(E・H・フレーゼル: KPIマトリックス)や荷主の視点からまとめられた「ロジスティクス評価指標の研究」(JILS)などが進められている。</p> <p>それらの内容から、整理・体系化されたロジスティクスパフォーマンスの計測手法、ベンチマーク手法や指標の活用方法などを共有し、先進企業での事例の研究、参加企業間での情報交換等を通じ、それぞれ各社でロジスティクス指標の導入し活用する場合の課題及びその解決方法などを研究することを目的とします。</p>	
<p>■ 進め方 :</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1回目: 研究目的及び進め方検討、各社のロジスティクス実態について</li><li>2回目: 「物流KPI」・「ロジスティクス評価指標の研究」について情報共有</li><li>3回目: 研究モデル企業選定、研究課題の設定(目標など)</li><li>4回目: 研究モデル企業のロジスティクス実態把握(業務、情報など)</li><li>5回目: ロジスティクス指標の導入方法の検討</li><li>6回目: ロジスティクス指標の活用方法の検討</li><li>7回目: 研究内容整理&amp;まとめ</li><li>8回目: 報告書作成</li></ol>	
<p>■ 募集対象者 :</p> <p>流通企業・物流企業におけるIT及びロジスティクス関連マネージャー</p>	

以上

テーマ4：	リーダー担当者向け グループ研究
<b>グリーンICTへの取り組み ～環境を取り巻くITの最新の取り組みと企業責任～</b>	
<b>■ 概要：</b> 今日の企業には、地球環境の保全に対する社会や市場の要請を社会的責任と受け止め、事業活動を通じて環境保全に配慮し行動する姿勢が問われている。その行動の中でICTにかかわる領域はグリーンICTと呼ばれますが、そこにおいてIT部門がなすべき取り組みは、大きく「ITのエコ (Green of IT)」と「ITによるエコ(Green by IT)」に分けられ、近年の社会情勢を受けて米国の「グリーンニューディール政策」をはじめとし環境を一つの経済活動の要とする動きの中で、どのようなグリーンICTの対応が環境と経営両面に対しインパクトがあるかを検討します。	
<b>■進め方：</b> 1回目：概要討議 2回目：グリーンICT市場調査 3回目：グリーンICT取り組み事例調査 4回目：グリーンICT技術動向調査 5回目：自社グリーンICT戦略の検討1 6回目：自社グリーンICT戦略の検討2 7回目：グリーンICT戦略における課題と対策 8回目：研究報告書作成評価	
<b>■募集対象者：</b> IT戦略策定／企画 関係者の方	

以上

テーマ5：	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>企業における、クラウドコンピューティングの有効な利用方法</b>	
<b>■概要：</b> <p>情報システムの開発と運用業務の効率化が要求されていることに加え、リース会計基準も変更になったことより、情報システムを資産として所有するのではなくシステム運用業務を自社から切り離して、サービスプロバイダから提供されるサービスを利用する形態にニーズが移り変わり始めている。これを後押しするかのような近年の仮想化技術の発展より、大規模なサーバリソースをネットワーク経由のサービスとして提供するクラウドコンピューティングサービスが誕生し、情報技術分野の大きな潮流として注目を集めています。</p> <p>クラウドコンピューティングはサービス内容で分類すると IaaS、PaaS、SaaS に分類可能であるが、当グループでは IaaS と PaaS の一部機能（運用管理機能、開発支援機能）に焦点を絞り、企業におけるクラウドコンピューティングサービスの有効利用に関する調査を実施します。</p>	
<b>■進め方：</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1 回目：調査計画に関するすり合わせ</li><li>2 回目：パブリッククラウドの活用方法に関する仮説立案</li><li>3 回目：検証結果の共有会（AWS を実際に利用した結果の報告等）</li><li>4 回目：プライベートクラウドの活用方法に関する仮説の立案</li><li>5 回目：検証結果の共有会</li><li>6 回目：クラウド環境でのあるべき運用管理ツールに関する仮説立案</li><li>7 回目：検証結果の共有会（RightScale を利用しての実機検証の報告等）</li><li>8 回目：報告書作成</li></ol> <p>※上記は現時点での想定であり、変更になる可能性があります。</p>	
<b>■募集対象者：</b> <p>リーダー・担当者の方</p>	

以上

テーマ6：	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>仮想化技術適用によるコスト削減効果</b>	
<b>■概要：</b> 仮想化技術は、調査会社の「2009年度にもっとも注目すべき技術 TOP10」の1位にエントリーされるなど、本格的な適用段階へと入ってきています。また、昨今の景気低迷の影響でIT投資の抑制が求められる中で、仮想化技術の適用によるコスト削減効果に注目が集まっています。 本研究では、サーバ、ストレージ、ネットワーク、クライアントなど、様々な領域の仮想化技術を整理し、費用対効果の指標や、TCO削減効果を高めるための仮想化適用に関するガイドライン策定を目指します。	
<b>■進め方：</b> 1回目：仮想化市場動向と検討範囲確認（6月） 2回目：様々な仮想化技術の適用範囲と効果の調査（7月） 3回目：利用形態とライセンスに関する注意点確認（8月） 4回目：TCOの対象範囲とコスト削減が見込める項目の整理（9月） 5回目：費用対効果の定量的な指標検討（10月） 6回目：活動報告書全体の流れと骨子確認（11月） 7回目：活動報告書作成（12月） 8回目：活動報告発表会用資料まとめ（1月）	
<b>■募集対象者：</b> 以下のいずれかに該当する方。 <input type="checkbox"/> 日夜サーバの運用管理に携わっている方。情報システム部門のリーダーの方。 <input type="checkbox"/> 現在、自社内のシステムにサーバ仮想化の適用を検討している方。	

以上

## 2009年度 IT&ソリューション 研究活動テーマご紹介

テーマ7：	リーダー・担当者向け グループ研究
セキュリティ強化？業務効率化？勝てる企業に有効な情報共有環境 ～これからの企業に必要な業務環境・セキュリティとユニファイド・コミュニケーション～	
<b>■概要：</b> 情報漏洩をなくすために、ノートPCの持ち出しを制限しセキュリティ対策を実施している企業がいる一方、社内の業務効率を優先するために最新のICT技術を積極的に取り入れる企業もいます。 これらの取り組みは、昨今の企業活動においては、どちらも正しい選択と言えます。セキュリティを強化すれば、社外から社内ネットワークにアクセスし、業務データのダウンロードや業務アプリケーションの利用、様々な手段でコミュニケーションを取ることができるユニファイド・コミュニケーションの活用が不可となり、様々な場所での業務ができず現場の業務低下を招きます。しかしながら、情報流出を未然に防げるので、経営層から見れば課題解決手段の一つです。 本研究では、セキュリティ強化と業務効率実現する、今後の情報共有基盤はどうあるべきか検討・研究していきます。	
<b>■進め方：(予定)</b> 1回目：参加各社の業務内容 2回目：参加各社の施策報告・検討 3回目：自分の考える業務環境 4回目：現場意見の討議検討 5回目：経営層意見の討議検討 6・7回目：ソリューション調査 8回目：グループ研究に関する報告書作成 9回目：討議&まとめ	
<b>■ 募集対象者：</b>  情報システム企画部門の方、経営企画部門の方、一般社員の方	

以上

テーマ8 :	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>ユビキタス 2.0 のマーケティング</b> ～POU のマーケティング・ビジネスモデル・技術に関する検討～	
<b>■概要 :</b> <p>POU とは Point Of Use の略である。まだ具体的な定義はされていないが、ここでは「様々なデバイス（携帯、センサー、監視カメラ、タグ、ICカード、ネット、POS）で取得した“誰がいつどこで何をした”などの「使用履歴」のこと」とする。POU は慶應義塾大学の國領二郎教授が初めて用いた言葉である。「端末で捕捉され集積された情報に、マーケティングの分野で大きな経済価値がみいだされつつある。インターネットなどで、書籍検索をした時などに、検索結果と一緒に広告が出てくるが、それは検索をした自分自身の購買パターンは勿論、他の人がどんな購買行動をしたかという情報を反映し、見た人の購買確立を高める広告を表示する。この一連の動きを POS から POU の時代へと呼んでいる。」ということである。先行しているサービスとしてはウェザーニューズが行っているコンシューマーが天気情報（ゲリラ豪雨など）を集めるモデルがある。しかしそのような事例は少なく、未知な領域であると言えます。</p> <p>今後 POU 情報が大量に発生し、まとめ、加工・編集することでさまざまなビジネスが生まれてくると予想される。この会では、そのような POU に関して基礎調査する。可能ならビジネスモデル化する。POU に関してのゲストスピーチも予定している。</p> <p>キーワード：マーケティング ユビキタス 2.0 デバイス 使用履歴 位置情報</p>	
<b>■進め方 :</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1 回目：顔合わせ、POS と POU に関して</li><li>2 回目：POU の事例、(ゲストスピーカー)</li><li>3 回目：技術から見た POU (G 空間)</li><li>4 回目：マーケティング・ビジネスから見た POU (i コンシェル)</li><li>5 回目：現場視察 or 合宿 (中間総括)</li><li>6 回目：POU のビジネスモデル化</li><li>7 回目：報告書の骨子と方向性の議論</li><li>8 回目：報告書の作成と評価</li></ol>	
<b>■募集対象者 :</b> <p>POU に興味を持っている方、マーケティング・新規事業に興味がある方、消費に敏感な女性、若手歓迎。システム、営業など、職種は問いません。POU で新しい分野を切り開きたいという意欲的な方を募集しております。</p> <p>業界はこだわりませんが：インフラ系（交通・通信・電力）、小売・BtoC 系、流通・物流系、旅行系、自動車系、ネットサービス系、携帯系などが今後のビジネスに繋がると考えています。</p>	

以上

テーマ9 :	リーダー・担当者向け グループ研究
Web システムのユーザインタフェース評価の手法とポイント	
<b>■概要 :</b> 近年、情報システムの見え方や操作性への注目が高まっています。しかし、ユーザビリティの良し悪しは、芸術的な側面が注目され易く、定量的な評価方法や、根拠だった評価を行いきいものです。本研究では、Webシステムのユーザインタフェースを評価する際、WebサイトのUIをどのような視点から、どのような基準・手法で評価すれば、安定的に高いユーザビリティを確保できるかについて考えます。デザイン工学や、認知学に基づいた原理・原則を土台に、基本的なWebシステムから、いま流行のリッチなWebアプリケーションまで、ユーザインタフェース評価のポイントについて考察を行います。	
<b>■進め方 :</b> 1 回目 : Web システムユーザビリティの現状についての調査 2 回目 : 成功事例、失敗事例研究 3 回目 : ユーザビリティを左右する原則について考察 4 回目 : 基本的な Web システムにおける評価ポイントについて研究 5 回目 : 基本的な Web システムにおける評価手法について研究 6 回目 : リッチな Web システムにおける評価ポイントについて研究 7 回目 : リッチな Web システムにおける評価手法について研究 8 回目 : グループ研究に関する報告書作成 9 回目 : 討議&まとめ	
<b>■募集対象者 :</b> 情報システム企画部門の方、業務企画部門の方、この分野に興味をお持ちの方	

以上

テーマ10 :	リーダー・担当者向け グループ研究
<p>プロジェクトを成功させるために ～ 何がプロジェクトの成功と失敗を分けるのか ～</p>	
<p>■概要：</p> <p>システム開発／運用のプロジェクトは、品質、コスト、納期の計画達成が強く求められます。一方で、品質不良、予算オーバー、納期遅れ等が頻発し、最悪は本番稼動に至らないというケースも発生しています。また社会インフラと呼ばれるシステムは、その信頼性が社会と監督官庁の厳しい目にさらされています。</p> <p>本研究会では、</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ メンバーの抱える現実の問題や関心テーマを出し合って共有し、</li><li>・ 事例と知識体系の研究を通し成功要因と失敗要因を議論し、</li><li>・ メンバーの日々の業務に有効な形式知の形成を目指します。</li></ul> <p>プロジェクト成功の秘訣といった単純なノウハウ(いわゆる銀の弾丸)が存在するわけではなく、総合的な努力の積み重ねが必須であるからこそ、木だけではなく森の形や大きさを正しく押さえることが重要です。その上でメンバーの現実の課題にアプローチします。</p>	
<p>■ 進め方：</p> <p>ワークショップ形式で次の流れで進めて行きますが、会合回数は一例です。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 初期(1～3回)：メンバーの問題意識、課題、関心テーマを共通テーマ研究テーマに収束させ、更にその研究テーマに対するアプローチ方法、事例、知識体系等を固めます。</li><li>・ 中期(4～11回)： 各種の研究材料を毎回各自分担して持ち寄り、メンバー間で徹底した議論を繰り返して行きます。最終的にグループとしての結論をまとめます。</li><li>・ 終期(12～14回)：活動報告書と発表用PPTを作成します。</li></ul>	
<p>■募集対象者：</p> <p>現在あるいは今後システム開発／運用に携わる方(企画者、開発担当者、運用担当者、プロジェクトマネジャー、管理者など)、この分野に興味をお持ちの方</p> <p>■ キーワード：プロジェクトマネジメント、全体最適、PMBOK、CMMI、プロジェクトマネジメント方法</p>	

以上

テーマ11：	リーダー・担当者向け グループ研究
<p>プロジェクトファシリテーションを活用したシステム開発の薦め ～ 3Kからの脱出、楽しくプロジェクトを乗り切ろう ～</p>	
<p>■概要：</p> <p>システム開発プロジェクトを成功に導くためには、プロジェクトマネジメントが重要なことは古くから言われています。しかし、プロジェクト計画を最優先事項と考えるあまり、ハードなプロジェクトで燃え尽きてしまったり、人間関係で行き詰ったりしてしまう人もいます。ここで重要になるのがプロジェクトファシリテーションです。プロジェクトファシリテーションは、プロジェクトの現場を活性化し、モチベートし、協調関係を作るために必要な手法です。</p> <p>本テーマでは、現在、多くのプロジェクトマネージャやラインの組織長が実践している計画管理型のマネジメントと、新しく注目されているプロジェクトファシリテーションによる協調参加型のプロジェクトマネジメントのとの違いや特徴を明らかにし、お互いの技術をどのように活用すれば、プロジェクトを成功に導けるのかについて研究します。</p>	
<p>■進め方：</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1回目（6月）：方向性・進め方の討議</li><li>2回目（7月）：各社のプロジェクトマネジメントの状況</li><li>3回目（8月）：プロジェクトの成功に大切なもの</li><li>4回目（9月）：プロジェクトマネジメントとプロジェクトファシリテーション</li><li>5回目（10月）：プロジェクトファシリテーションの研究</li><li>6回目（11月）：プロジェクトを成功に導くには</li><li>7回目（12月）：報告書のポイントのまとめ（具体的なプロジェクト運営の提案）</li><li>8回目（1月）：報告書作成</li></ol>	
<p>■募集対象者：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ プロジェクトマネージャや、プロジェクトマネージャを目指している方</li><li>・ 当分野に興味をお持ちの方</li></ul>	

以上

テーマ12： リーダー・担当者向け グループ研究

### 「ソフトウェアの品質向上」

#### ■概要

近年、ITの社会への適用拡大は目覚ましいものがあり、技術・規模の両面で開発難易度が上がっています。その上、ソフトウェア品質の要求レベルも高くなり、ひとつの不具合が関係各社にとって重大な影響を及ぼすようになってきています。上流工程でのインスペクションやレビュー、下流工程でのテスト技術などといった基本的な考え方、技法は普及され始めていますが、それでもソフトウェアの品質は十分な水準に達していないようです。

本研究会では、

- ・ メンバーの経験や興味を共有し、
- ・ 事例紹介や研究を通し、品質上の成功要因と失敗要因、およびその解決策を議論し、
- ・ メンバーが選定した品質向上策を学びます。

これらを通してソフトウェア品質を向上させ、プロジェクトを成功させるためには何が必要かを考察していきます。

■進め方：ワークショップ形式（7～8回）：「ソフトウェア品質」を題材とした場合の一例です。

- 1回目：各メンバーの問題意識、対応状況の紹介
- 2回目：品質向上のための技法・手法とその特徴
- 3回目：事例紹介～プロジェクトオーナーと開発PM
- 4回目：品質目標の設定と課題解決へのシミュレート
- 5回目：品質向上方針の策定
- 6回目：方針の具体化
- 7回目：活動報告書の全体の流れと骨子確認
- 8回目：活動報告書の作成、討議&まとめ

#### ■対象者：

現在あるいは今後システム開発やテストに携わる方

（開発責任者、PM、チームリーダー、開発者、テストマネージャー、テスト設計者等）

この分野に興味をお持ちの方

#### ■キーワード：

品質管理、リスク管理、フロントローディング、テスト技法、Wモデル、EVM、リソース管理、進捗管理、開発プロセス、テスト駆動開発、静的テスト

以上

テーマ13:	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>増え続けるデータ量(データ爆発)への対応</b> ～ データ管理のベストプラクティスとは ～	
<b>■概要：</b> <p>企業で扱うデータ量は年々増加の一途を辿っています。IDC Japan の予測ではこの不況下でもデータ量の伸びは止まらず、2008年から2012年の平均成長率は57%と予想されています。これを容量に換算すると、2008年度の国内出荷容量が約320PBに対して2012年度には1900PB以上という途方もないデータ量になります。</p> <p>データ量の急激な伸び(データ爆発)に伴い、ストレージ管理者には「効率的なストレージ投資」、「バックアップの効率化」や「可用性の向上対策」が求められます。</p> <p>一方、外部環境(法規制、内部統制対応、事業継続)から「データの長期保存」や「災害対策」、「セキュリティの強化」等の課題も重要な位置を占めます。</p> <p>本テーマでは参加企業のIT部門が要求されるデータ管理の課題を洗い出し、効果的なデータの管理手法を探っていただきたいと思います。</p>	
<b>■進め方：</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1回目：(6月)現状認識、各メンバーの問題意識の確認</li><li>2回目：(7月)保有しているデータの棚卸(保有量、種類、増加率)</li><li>3回目：(8月)管理上の課題と要求事項</li><li>4回目：(9月)データ増加対応についての検討</li><li>5回目：(10月)データ長期保存対応についての検討</li><li>6回目：(11月)バックアップの効率化についての検討</li><li>7回目：(12月)災害対策、セキュリティについての検討</li><li>8回目：(1月)報告書の作成と評価</li></ol>	
<b>■募集対象者：</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ IT 部門、情報システム部門でストレージ管理やデータの管理、企画を担当されている方、この分野に興味をお持ちの方</li></ul>	

以上

テーマ14：	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>システム開発成功のためのRFPの作り方</b>	
<b>■概要：</b> <p>日本情報システム・ユーザー協会（JUAS）の調査によれば、システム開発において、品質、予算、納期の目標を達成できない「問題プロジェクト」の割合が無視できなくなっています。「納期遅延理由」では、「RFPの内容不相当」「要求仕様の決定遅れ」「要求分析不十分」の三つの理由が上位を占めています。システム開発を成功させるためには、要求定義（RFP作成）が重要です。しかしながら同じ調査によれば、ユーザ企業自身ではRFPがあまり作られていないという実態が浮かび上がっています。</p> <p>本テーマでは、RFP（要求定義）の重要性と課題を確認し、システム開発成功のために目指すべきRFPを検討し、その上で目指すRFPの作り方を研究します。</p>	
<b>■進め方：</b> <p>1回目：（6月）研究テーマの方向性、進め方の討議（参考論文紹介） 2回目：（7月）システム開発に影響するRFPに関する課題の共有 3回目：（8月）システム開発成功のために目指すべきRFPの討議 4回目：（9月）目指すRFPの作り方の討議#1 5回目：（10月）目指すRFPの作り方の討議#2 6回目：（11月）活動報告書の骨子・主張の討議 7回目：（12月）報告書検討 8回目：（1月）報告書作成</p>	
<b>■募集対象者：</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・RFP作成（要求定義）の方法を検討されているリーダー、担当者の方</li><li>・利用部門主体でのRFP作成を検討されているリーダー、担当者の方</li></ul>	

以上

テーマ15： リーダー・担当者向け グループ研究

ビジネスプロセス・モデリングによる業務の可視化

■概要：

企業では、ビジネス環境の変化に迅速・柔軟に対応できるITシステムがこれまで以上に求められており、そのためにビジネス戦略/業務プロセスに連動する情報システムの構築が必要とされています。また、顧客サービスの向上、内部統制、業務品質・効率の向上などの経営課題に対して、プロセスの見える化、ルール化、システム化と継続的改善を進める動きが進んでいます。

プロセスの見える化においては、単に業務フローを書くだけでは業務の粒度や、記述方法が統一されません。見える化が達成されたとしても、関係者に対するコミュニケーションの道具として使いづらいものになってしまいます。

本テーマでは、ビジネスプロセス・モデリングによって業務を可視化する方法を研究し、業務の改善やシステム化などモデル化の目的に応じたモデリングのポイントを探ります。

■進め方：

- 1回目：(6月) 研究テーマの方向性・進め方の討議 (3D-Blueprinting 紹介)
- 2回目：(7月) モデリングの目的と、対象業務の選定
- 3回目：(8月) モデリングの視点・粒度の討議
- 4回目：(9月) モデリングの試行と課題抽出
- 5回目：(10月) モデリング実施とモデリングのポイント討議 (1回目)
- 6回目：(11月) モデリング実施とモデリングのポイント討議 (2回目)
- 7回目：(12月) 討議内容の整理、まとめ
- 8回目：(1月) 報告書作成

■募集対象者：

- ・業務プロセスの可視化・改善を検討されている、リーダーや担当者の方
- ・業務分析や要件定義に取り組む、リーダーや担当者の方
- ・ITを活用した業務改革を検討されているリーダーや担当者の方

以上

テーマ16	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>社内ナレッジシェアリング 成功の鍵</b> ～ リアル&バーチャルな場のデザインを考える ～	
<b>■概要：</b> <p>皆さんの会社の社内ナレッジシェアリングはうまくいっていますか？ 一頃、ホワイトカラー生産性向上の施策としての「ナレッジマネジメントシステム」導入がブームになりましたが、期待された成果が出せた企業は多くありませんでした。「成功率は3割にも満たなかった」という調査結果もあります。</p> <p>ナレッジシェアリングは、「ナレッジ」を共有化することで、生産性の向上、意思決定スピードの向上、更には新たな価値の創造を狙うものです。システムを導入するだけで達成できるものではなく、誰が何をどのように活用していくかという「場のデザイン」が重要です。</p> <p>本研究会では、</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 成果を出すために必要な「ナレッジ」とは</li><li>・ ナレッジシェアリングに必要な文化・ルール・心がけ</li><li>・ 陳腐化しないナレッジシェアリング</li></ul> <p>などを通して、ナレッジシェアリング成功の鍵を考察します。</p>	
<b>■進め方：</b> <p>1回目：現状の課題とナレッジシェアリング（知識・情報の共有）への期待（6月） 2回目：企業として共有すべきナレッジとは？（7月） 3回目：参加メンバによる「自社のナレッジ共有の事例（成功/失敗）、要望」（8月） 4回目：ナレッジシェアリングの活用事例調査（一般企業に対して）（9月） 5回目：ナレッジシェアリング試行①（10月） 6回目：ナレッジシェアリング試行②（11月）</p> <p>※活用事例調査をベースに実際にナレッジシェアリングを進めながら討議し、ナレッジシェアリングの仕組みや運用、取り組み姿勢などの勘所をつかみます。</p> <p>7回目：試行内容の整理・評価（12月） 8回目：グループ研究報告書作成（1月）</p>	
<b>■募集対象者：</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ ナレッジシェアリングに必要性、あるいは期待を感じている方</li><li>・ 自社のナレッジシェアリングに疑問や問題を感じている方</li><li>・ ナレッジシェアリングに興味がある方</li></ul> <p>※ 職種、事前知識の有無は問いません。</p>	

テーマ17:	リーダー・担当者向け グループ研究
<b>新たな“学びの場”へのチャレンジ</b> ～ インフォーマルラーニングが人材育成の鍵 ～	
<b>■概要:</b> 企業の人材育成部門は、企業内研修にほとんどの労力を使っています。たしかに、研修は育成の重要な施策ですが、研修をどんどん提供していくと、いつの間にか、研修を実施することが目的化し、研修を実施すれば育成していると勘違いしてしまいがちです。また、受講側もだんだん研修に対する目的意識が薄れ、受講目的の理解や受講後のトライアウトの機会はおろそかになりがちです。一方、OJTは、現場のスリム化や効率化の追求の結果、成長の場としての業務経験という形が思うようにならず、トライアウトを実施するような環境がありません。 そこで、最近、注目されているのが、インフォーマルラーニングです。 インフォーマルラーニングとは、自らが積極的に他者とのかかわりを持ち、あまり計画化されない状況で、ゆるやかにリラックスした環境で学ぶことが特徴です。特に、相互コミュニケーションを重んじながら、相互啓発ができる学びの場を提供し、活用していくことを指しています。 本研究会では、このような新しい学び方について研究し、どういった活用をすれば、育成に繋がるのか、など、その活用プランについて検討します。	
<b>■進め方:</b> 1回目(6月): 方向性・進め方の討議 (インフォーマルラーニングとは) 2回目(7月): 企業内の人材育成の状況 (各社の状況, 課題の共有) 3回目(8月): 大人(社会人)の学び方, 成長の仕方 4回目(9月): 学びのサードプレイス (研修でも, OJTでもない, 第3の場) 5回目(10月): 事例の研究 (タバコ部屋, 社内コミュニティ, Googleのカフェなど) 6回目(11月): 具体的なインフォーマルラーニングの場のイメージ 7回目(12月): 報告書のポイントのまとめ (具体的なサードプレイスの提案) 8回目(1月): 報告書作成	
<b>■募集対象者:</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 人材育成部門の方</li><li>・ 当分野に興味をお持ちの方</li></ul>	

テーマ18：	リーダー・担当者向け グループ研究
現場技術者の技術やノウハウを組織に活かすには ～ ITものづくりにおける技術伝承のあり方 ～	
<b>■概要：</b> <p>日本の産業を支える製造業のものづくり現場では、団塊の世代が培ったノウハウや技術を、どのように企業の現場に伝承していくかが重要な課題となってきています。特に、機械では決してできない人のもつ技能やノウハウは、日本のものづくりの現場を支えているといっても過言ではありません。それでは、情報システムの設計・製造・保守の現場ではどうでしょうか。情報通信技術の発達によって、ビジネスの現場でやりとりされる知識は明文化され、データとして管理され、容易に流通、利用ができるようになってきています。しかし、本当に現場で必要となる知恵やノウハウなどが管理され、効果的に流通し、必要な人に伝わっているのでしょうか。技術進化が早いからといって、本当に必要なものを忘れていないのでしょうか。</p> <p>本テーマでは、こういった問題意識から、現在の技術やノウハウの流通、伝承のための施策（徒弟制度、研修や講習、OJT、ナレッジマネジメントシステムなど）の実施状況を俯瞰した上で、どのようにすれば現場の知恵が、流通、伝承ができるのかを現場ノウハウの掘り出し方、ノウハウを伝えるための工夫の仕方などについて研究していきます。</p>	
<b>■進め方：</b> <ol style="list-style-type: none"><li>1回目（6月）：方向性・進め方の討議</li><li>2回目（7月）：製造業の技術伝承について学ぶ。 各社の取り組みや現状を共有し、問題点を共通の認識にする</li><li>3回目（8月）：流通、伝承したいナレッジは何か。 それはどこにどのように蓄積されているか。</li><li>4回目（9月）：各種施策の現状 (徒弟制度の難しさ、研修や講習の落とし穴、OJTという名の無策など)</li><li>5回目（10月）：情報システム産業ならではの技術やノウハウの伝承をうまく実施しているところはないか、状況を調査する。</li><li>6回目（11月）：何をどのようにすれば技術、ノウハウの流通、伝承ができるのか</li><li>7回目（12月）：報告書のポイントのまとめ（ITものづくりにおける技術伝承のあり方）</li><li>8回目（1月）：報告書作成</li></ol>	
<b>■募集対象者：</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 人材育成部門の方（現場でのOJT/OJDのあり方を検討されている方）</li><li>・ 当分野に興味をお持ちの方</li></ul>	

以上

テーマ19：	若手社員向け グループ研究
<b>IT技術者の仕事</b> ～企業人4年～5年生に向け、役に立つテーマ～	
<b>■概要：</b> 「IT技術者の仕事」は入社4年から6年程度の若手技術者を対象に、毎年参加者の興味のあるテーマを取り上げ、研究活動を行ってきました。今年で3年目になりますが、1年目は技術者としての技術習得地図を持つため、「キャリアパス」の研究を行い。2年目は職業人としてグローバルな視点から世界のIT業界の違いを研究しました。そして3K問題などこの業界の悪いイメージを改善するために3KをKIBOU（希望）に変えるための方策を検討しました。このように、若手技術者が希望を持って仕事に打ち込むための方策を研究テーマとして取り上げてきたといえます。今年は環境問題に対してIT技術でどのように貢献できるかを研究するのはどうでしょうか。この研究会は若手技術者を対象に、参加者の意向を重視して進めていきますので、是非とも積極的に研究活動を行っていきましょう。 参加者に特に前提知識は必要としませんが、研究活動を通して将来の糧となる知識を獲得していただくことを狙いとしています。	
<b>■進め方：</b> 1回目：ガイダンス 2～3回目：環境問題の現状解説、環境誘発型ビジネス（グリーンITを含む）をめぐる新しい動き。 研究テーマの検討 4～5回目：研究テーマに基づくマイルストーン作成 6～7回目：研究活動 8～9回目：研究活動：研究活動の内容、進捗により適宜研究活動の回数を増減する 10回目：報告書のまとめ *2回目と、9回目に一泊の合宿を予定（参加者の方は有料となります。）	
<b>■募集対象者：</b> 情報システム部門の4～5年生。女性の方も歓迎です。	

以上

<p>テーマ：20</p>	<p>女性の方限定 グループ研究</p>
<p>女性技術者がいきいきと働き続けるためのワークライフバランス</p>	
<p>■概要：</p> <p>ワークライフバランス（WLB）は女性だけに必要なわけではありません。しかし、女性が社会で働き続けることの障害を克服せずに、社員のワークライフバランスは実現しません。女性には制約が多くあり、職場に女性のネットワーク、女性を支える同僚、上司とのコミュニケーションが十分あれば、日頃から意見や情報を交換して、適切な選択や判断をすることができます。しかし、現実にはそうでないことの方が多く、がんばっていても孤立しがちな女性技術者たちが、自分のワークライフバランスをしっかりと考える時間を持つことは重要なことです。</p> <p>プライベートと仕事、それぞれでの自分の希望は何か、を見据え、自分の人生をしっかりと設計しながら、どのように能力を高めキャリアを積んでいくかについて、自社以外の女性たちとのネットワークや社会のロールモデル研究などを通して、共に学び互いに刺激しあえる研究会をめざします。</p>	
<p>■進め方（案）： メンバーが集まったところで決定の予定</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1回目：テーマ趣旨説明、メンバー自己紹介</li> <li>2回目：各社状況の発表と意見交換（問題点の発掘）</li> <li>3回目：希望テーマ（方向性）・活動の決定と討論。</li> <li>4回目：見学（女性を活用している会社、女性が働きやすい会社、テレワークオフィスなど）</li> <li>5回目：討論（自由課題）</li> <li>6回目：合同討論会（外部研究会などとの合同イベント）</li> <li>7回目：各社調査・アンケートなどの実施と報告</li> <li>8回目：講師を招いて勉強会。個人の改善目標作成</li> </ol>	
<p>■募集対象者：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の職場内で同じような状況の女性、相談相手が少なく、外部とのコミュニケーションに不足している女性技術者、専門職</li> <li>・近い将来、少し先の将来に自信が持てず不安を解消したいと考えている女性社員</li> <li>・他社状況、他部門状況を聞いて参考にしたいと思っている女性社員</li> <li>・女性ネットワークを作りたい、参加したいと思っている女性社員</li> <li>・良いロールモデルに会いたい、元気になりたいと思っている女性社員</li> </ul> <p>女性限定です。該当する女性、働き続けてほしい女性を部下に持つ上司の方はぜひ、その女性をご推薦ください。</p>	

以上